10.「閃きの瞬間」

(がーん……。太った)

食べて体力つけてライブをやって、また食べて歌ってまた食べる。

<お昼、代官山でパスタ。家具を見て、夜ミカとタケと下北>

<9時までスタジオ。みんなで焼き肉。4時まで盛り上がる>

日記を見てもわかるように、最近めっきり自炊をしなくなった。

外食ばっかりだ。

1996年の正月には香港、MIRACLE NIGHT DIVINGツアーが終わってすぐにバンコク、プーケット、ベネチアやミラノへも旅をした。

いろんな所へ出かけ、素敵なもの美しいものを見ておいしいものを食べる。心にも、そして体にも、栄養がついていた。

(やせよう。……ヤバイよ、ゆきお!)

ミネラルウォーター、梅こぶ茶におそば。

夜9時過ぎたら、絶対に食べない。お酒も控えよう。

しかし。本格的にダイエットを開始した数日後、YUKIはインドで本場のカレーを食べていた。

仕事で来たボンベイ、めったに訪れる機会のない土地である。となれば、やはりここで、本場のものを食してみたい。気持ちはわかる。

ボンベイへは「クラシック」のプロモーション・ビデオ撮りでやってきた。スタジオに一歩入れば、ミュータントに扮した現地エキストラが大勢いる、猿もいれば象までスタジオにいる。

(これってなんか、異星でライブをやってるみたいだなぁ)

途中何度もバッテリーが落ちて、そのたび5時間撮影が中断した。マイケル・ジャクソンも滞在したという豪奢な海辺のホテルの部屋は、湿気がたっぷり。おまけに日本への電話はなかなか通じない。

宗教も文化も習慣も時間の流れも言語も、日本とは社会のシステムがまるごと異なる場所だった。

香港やバンコクやプーケット、ベネチアやミラノともまったく違う。

「搭乗まで時間あるよね。じゃあ、あたし、お茶してるわ」

スタッフやメンバーと別れ、YUKIはムンバイの空港のラウンジで紅茶をオーダーし、ぽっかり時間が空いたときはいつもそうしているように、テーブルの上にノートを広げた。

日記でも書こう、それにしても日本への電話がなかなかつながらないのにはまいったなあ……そんなふうに思っていたときである。

ノートの片隅に、すらすらと文字が書き記されていく。

（出来た！ すごいよ。とってもいい！ これ、大好き！）

わからなくなる時は 助けてね

暗くて狭い所は 苦手なのよ

ダーリンダーリン 青い月を歩く

ダーリンダーリン 赤い欲望 白い想像 柔らかい表情

ダーリンダーリン 歩いて行きましょう

何気ない 気分の中で

好きな人を想う。

ただそれだけのことが、こんなにも心を軽やかにしていく。心に羽が生えたみたいっていうのは、きっとこういうことをいうんだ、とYUKIは思う。

（しあわせの形って、毎日、同じじゃないんだ。自分でも気づかないうちに、ちょっとずつちょっとずつ変わっていくんだね）

YUKIの心のなかにはいつも大切な人がいた。

それが恋なのか愛なのか、それとも友情に近い種類の感情なのかはよくわからなかったけれど、自分のなかにその人が棲んでいることはいつもいつも感じていた。

焦がれるような行き場のない想いだけが膨らんで、胸を痛める。

そんな日もあれば、風の凪いだ夕刻の静かな海のように、くつろいだ心地にさせてくれるときもある。

その人は、いつもそばにいると感じさせてくれる大切な存在だった。「ラブリーベイベー」の詞の原型が出来たこと、それはこれから始まろうとしているレコーディングの行方を予測するうえで重要な鍵を握っていた。

ムンバイの空港でのこの閃きは、YUKIのなかの、才能という名前のついた箱をこじ開けるに十分な効力を持っていたのだ。

バンドは大きな波に乗っていた。

『MIRACLE DIVING』はミリオン・セラーを記録、さらには「そばかす」のヒットで、このバンドの周囲の期待は膨張していた。

ミリオンからダブル・ミリオンへ——少なくともスタッフには、JUDY AND MARYの時代を築くための軌道が見えていたはずだ。

寄せられる期待が、プレッシャーになるバンドではない。

そもそもギャラリーがいたほうがレコーディングは盛り上がるという連中なのである。それに加えて彼女たちは逆境にも強い。自らを追い込んで、追い込まれたところで実力以上の力を発揮するという場面なら、自分たち自身でこれまでに幾度となく経験している。

YUKIのなかではネガティブなスイッチがまったく遮断されていた。

（誰にも文句を言わせない、いい歌をうたえるようになってきた！）

「そばかす」のレコーディングから思うように歌がうたえるようになったこと、そして武道館をやりとげた事実が彼女の自信になっていた。

揺るぎないその自信が、YUKIに『THE POWER SOURCE』の歌をうたわせたと言ってもいいだろう。

アルバムのコンセプトからすべて任せてもらいたいと、TAKUYAがトータル・イメージから選曲まで提案してきたとき、YUKIはこのアルバムでの自分のキーワードを彼に伝えている。

「あたし、今回はとにかく踊りたいんだ」

MIRACLE NIGHT DIVINGツアーが終了してからというもの、YUKIは無性に、踊りたい！ もっと踊れるようなヤツを作りたいと思っていた。好きな音楽をかけていつも家で踊っている。踊るのは大好きだ。けれども、自然に体が揺れる音楽が、少しずつ変わってきている。

大好きなアルバム『ORANGE SUNSHINE』にはなかったリズムが『MIRACLE DIVING』にはあった。レコーディング中、気づかなかったそのことを、ツアーで歌っている間に彼女の体が感知していた。

YUKIの意見に、TAKUYAも賛成だった。

次々に上がってくるTAKUYAや恩田の曲に、YUKIの言葉は不思議なほどぴたりと合致した。デモ・テープを受け取り、軽く主旋律をなぞっているうちに、言葉は次々にYUKIのくちびるからこぼれていく。

息を吸い、吐く。呼吸するのと同じように、メロディが体の内に入るとそこに言葉がのり、歌がこぼれていく。

思考するよりも先に、YUKIは言葉を歌っていた。

絶対にいいものが出来る——その感触を胸に、YUKIは10月29日から1ヵ月、マスター・エンジニアであるマイケル・ツィマリングの待つロンドンへと渡る。

CHISWICKと書いてチズウィックと読む。ヒースロー空港から車で20分ほど走った所に彼女たちが滞在するホテルがあった。

アットホームな雰囲気のホテルであること、キッチンのあるコテージ・タイプの部屋を使用できること、それにリビングの窓から見える庭園の緑がYUKIにはうれしかった。すぐに気に入った。

ホテルから通りを渡った所には、メトロポリス・スタジオ。

かつて発電所だったことからパワー・スタジオと呼ばれているこのスタジオには、コンソール・ルームとブースがあるフロアの上に、広いウェイティング・ルームが設置してあり、YUKIはそこで詞を詰めたり、イラストやエッセイを書いた。

窓辺に置かれたガラスの丸テーブルには、ニーチェの詩集から村上春樹の小説までが山積みになり、パステルやサインペン、絵の具にクロッキー帳、チョコやクッキーやぬいぐるみが置かれ、いつしかYUKI専用のスペースとなった。

国内でのプリプロダクション片づかなかった作業を、10月31日から3日間行い、11月4日からYUKIたちはメトロポリス・スタジオでのレコーディングに突入した。

10月31日 朝早く起きすぎ。まだちょっと時差ボケかな。

ハロウィンなのでかぼちゃを買う。ミッキーがナイフを貸してくれたので作る。ひとりでだよ！！すごい、私って器用だったのね。

ハロウィンは大人の夜らしいぞ！ パーティらしいぞー。

でもちょっと喉の調子が悪いんだ。大丈夫かなぁ。

タバコを控えます。8：00ぐらいまでリハーサル頑張る。

11月3日 文化の日ですな。日本は振り替え休日で明日も休みらしい。午前中はずーっとごろごろして、3時にカムデンへ。

ポートベローに行きたかったが日曜日はやってないんだ。トホホ。

着いてすぐにFish & Chips、こんなに食ってりゃでかくなるさねぇ。

サングラスをふたつ買う。ふたつで20ポンドだった。安いぞっ！

夜はギター生演奏のある不思議なイタリアンへ。

明日からメトロポリスStで本格的にレコーディングだ。頑張るぞ！！

11月8日 2：00スタジオ入り。アクリルの絵の具を試してみる。

単行本用の友人たちの似顔絵を描く。一人ひとりの顔を思い出して描いてたら、会いたくなっちゃった。

みんな元気でやってるかのー。『果てたわ』も同時進行させてます。

歌詞もね。頭の中、すごいスクランブルしてるけど楽しい。

「BIRTHDAY SONG」「The Great Escape」を録ります。

２曲ともおそろしい速さでリズム録りを終えてしまう。グレイト！！

エクセレント！！って感じで、全員で夕食をとりにいこうっ！

ということになりINDIAを食べにいく。スタッフ、メンバー全員でeat out するのは初めて。なんか盛り上がってしまった。

夜のCHISWICKを歩く私たちは、5cm浮いてたよ。

スタジオに戻ってベースをちょい入れ直して、OKだす。

ロンドンに来て1週間ちょっと。ここはとても心地よい所。

言葉の壁はそりゃあ多少あるけれど、言葉じゃなく人を見る所。

それがなんとなくわかってきたような気がする。

11月12日 今日は「風に吹かれて」です。

佐久間さんが来る前に練習。とてもいい声だ！

なによー、いーよー、マイケル、きみは天才だっ！！

声の感じも決まったところで佐久間さん登場。「うん、いいね！」とみんなで言ってる間にちょこちょこやって終わる。Yeah！ Great！！

マイケルもいいねと言ってくれた。うれしかったわ。

YUKIは次の詞にとりかかる。「HEAVEN(「LOVER SOUL」)」だ。

廊下に出て階段に座って集中する。そうしたらとても良くなった。

After Dinnerに「The Great Escape」を歌って、

2回でOKテイクを録る。すごいっ！今日は2曲も歌入れしたので

「よし、もう1曲！」と「HEAVEN」をやろうとして失敗した。

えへへ。3曲は無理なのだよ、ちみ。今日は終わらせて明日歌おう。

11月17日 OFF。一日中のんびりすることに決める。外は大雨だ。

どこへ行こうとも思わない。夕方ぐらいまでお風呂に入ったりTVを

観たり洋服の整理をしたりする。LONDONはもうかなり寒い。

しばらく歩くことにする。CHISWICK HIGH ROADはとても長い。

ずっと歩くと公園があった。本屋さんにいってお花を買って少しの

パンと食料を買って部屋に戻る。TVを観てごはんを食べて、昨日ま

でのJ・A・Mの曲を聴きながら、アルバム・タイトルを考えている。

これでダメだったらあたしのセンスがダメってことだ。ものすごい力でやったものは、絶対にものすごく伝わるんだ——と、YUKIは日記に残している。帰国後、待ちかまえていた数えきれないほどのインタビューでも、彼女ははっきりとそう語っていた。

かつてあれほどつらいなあと感じていたインタビューにも、テレビやラジオで歌ったり話したりすることにも、YUKIはもう戸惑いを感じていない。今の彼女は、むしろそれを楽しんでいる。

暮れの『紅白歌合戦』や年末年始のスペシャル番組への出演に始まり、1996年の年末から1997年の早春にかけてJUDY AND MARYはさまざまなメディアに取り上げられていく。

「くじら12号」がブラウン管から流れ、街には『THE POWER SOURCE』のリリースを知らせる巨大な看板が置かれ、JUDY AND MARYはいくつもの雑誌のカバーを飾った。

気がつけば、YUKIたちは、ブームのなかにいた。